

◆ 巻頭言

たましいからほとぼしる声 ——共苦を基点として

阿木津 英

東日本大震災・津波と福島第一原発事故勃発ののち、2度目の3月を迎える。何という2年間だったことだろう。ごく身近な周囲にもこんな歌があった（引用は、筆者編集歌誌『あまだむ』『八雁』より）。

おほな む 大地震に果てし骸^{むくろ}の捨て置かれ放射線日々ふりそそぎたり
ちちはは 父母と蕨摘みにし仏具山痛みにも似て浮かびきたりぬ

市野ヒロ子

市野ヒロ子さんは、いわき市で生まれ育ち、親族が福島に住んでいる。あの3月、伝えられるニュースは他人事ではなく、身を嘔むようなつらさであった。泥の海に放置された骸にふりそそぐ放射線——眼前に見るような思いがするのだ。2年経った。ふるさとは誰にとっても甘美な思い出であるはずなのに、目に浮かぶとき胸が痛くなる。ふるさとを喪失した者だけが知る痛みである。

津波去りて果てなき荒地の夕ぐれを男の号泣聞こえ来たれり
男ひとり大声を上げて泣くを聞く極みの声に涙あふれ来

片野 浜子

テレビか何かで見たのだろう。一瞬のうちに日常がかき消え、瓦礫の山になった荒地に立って衝きあげるような極みの声を上げて泣く男。そのたましいからほとぼしる声に、涙があふれる。共苦の涙である。

共苦の涙の歌を読んだ者もまた胸の芯を揺るがされ、いまだ甘美なふるさとの思い出をもつ者も、故郷喪失の痛みとはどんなものか、一端でも気づかされる。

「なあんにも無くなつてたよ」こゑ^{すさ}荒み津波に呑まれし町より帰る
iPhoneのなかの被災地陸前高田ころうごかぬまに見てゐる

大光寺博子

家族の者がボランティアに行つて来たのだろう。荒んだ声の向こうに、被災地がある。体中の組織が被災地の荒みに浸透されてしまったかのような声。だが、iPhoneで撮った写真をいくら見せられても、こころの動かない自分がある。

こころの動かないおのれを意識すらしないこころの動かない者もいる。



PROFILE

阿木津 英
(あきつ えい)

歌人。現代短歌にフェミニズムの思想を織り込み、女性と短歌をテーマとした作歌活動や社会問題へ発言する姿勢が注目されている。歌集に『紫木蓮まで・風舌』『天の鴉片』（現代歌人協会賞）『蕨のちから』など。評論集に『折口信夫の女歌論』『二十世紀短歌と女の歌』など。第22回短歌研究新人賞、第39回短歌研究賞受賞。現代歌人協会会員・日本文藝家協会会員。日本女子大学・文教大学講師。短歌結社誌『八雁』編集発行人。